

日本における鍵盤ハーモニカの開発と
学校教育への導入について

豊田香菜子

Development of the Keyboard Harmonica and its
Introduction to the School Education in Japan

TOYODA Kanako

日本における鍵盤ハーモニカの開発と 学校教育への導入について

豊 田 香菜子

Development of the Keyboard Harmonica and its Introduction to the School Education in Japan

TOYODA Kanako

はじめに

日本の鍵盤ハーモニカは、1961年に卓上に置いて演奏できる吹奏楽器として、またオルガン（ここではリードオルガンのことを「オルガン」と表記する）より経済的で鍵盤学習にも最適な教育用楽器として誕生した。1959年にドイツで製造された押しボタン式吹奏ハーモニカ「メロディカ」が鍵盤ハーモニカの原型といわれている。日本での発売当初から、主に小学生が対象とされており、現在でもほとんどの小学校で鍵盤ハーモニカが使用されている。さらに、最近ではこの鍵盤ハーモニカの活用が低年齢化する傾向にあるということが指摘されている。全国の幼稚園教諭を対象に音楽活動について行った調査の結果でも、3分の2以上の幼稚園において鍵盤ハーモニカが使用されていることが明らかになった⁽¹⁾。音の識別能力は、4歳から7歳までの時期に、これ以降の時期よりはるかに向上するという聴覚の臨界期説がある⁽²⁾。鍵盤ハーモニカの導入期にあたる4歳から7歳までの時期が最も音を聞き分けられる敏感期とするならば、指導者は音に敏感になる環境を整えると共に、音の高低の理解など音楽的な基礎能力を得られるような音楽活動を保育や音楽科教育の中で考えることが重要である。

鍵盤ハーモニカは、鍵盤楽器と吹奏楽器を兼ね備えているという特徴があり、鍵盤楽器という点では音階を視覚と聴覚で確認できることから、音の高低（音高の配列）の気づきにつながることを期待される。吹奏楽器という点では、息の入れ方やタンギング技術を習得することができ、これは小学校第3学年から行うリコーダーの学習につながると考えられる。

しかしながら、幼児期や小学校低学年の児童にとって、息の調節やタンギング、25～32個の鍵の中から音を選んで弾くこと、指づかいを考えること、リズムを感じながら弾くこと

を同時に行うのは難しいのではないかと思う。これらは児童の楽器に対する苦手意識や嫌悪感を生み出すのではないかと危惧している。

そこで本研究では、鍵盤ハーモニカが誕生するまでの過程や、学校教育に取り入れられるようになった経緯について調べるとともに、実際の教育現場、特に初期教育段階における鍵盤ハーモニカの運用実態を明らかにし、問題点について検討する。

1. 鍵盤ハーモニカの開発について

鍵盤ハーモニカの一番の特徴は、吹奏楽器と鍵盤楽器を兼ね備えていることである。吹奏を必要とする鍵盤楽器としては、19世紀前半のイギリスのプッシュボタン式の楽器である「シンフォニウム」(写真1)、ドイツの「プサルメロディコン」(写真2)などが起源である⁽³⁾。そして、1959年にドイツのホーナー社がプッシュボタン式の吹奏ハーモニカ「メロディカ」(写真3)を製造・販売した。ホーナー社は、リード楽器であるハーモニカやアコーディオンを販売する中で、現在の鍵盤ハーモニカに類似した「メロディカ」を開発した。日本で「メロディカ」が知られるようになったのは、1959年に出版された雑誌で「新楽器 メロディカ 穴の代わりにピアノのようなキイを使った新しいフルート風の楽器メロディカが、このほど西独のミュンヒヒでお目見得した」⁽⁴⁾と紹介されてからである。

「メロディカ」は、吹き口が鍵盤ハーモニカで用いるようなジャバラ状の長いものではないため、卓上で演奏は不可能であった。そのためリコーダーを吹くように両手の親指で楽器を支えながら、白鍵は右手、黒鍵は左手の親指以外を使って演奏する。「メロディカ ソプラノ」は25鍵できていて、吐く息を使いボタンを押すことでリードが振動し、音が鳴る仕組みである。価格は5,000円で、その当時では非常に高価な楽器であった。

この「メロディカ」の構造に着目した鈴木楽器会社が、プッシュボタン操作型から鍵盤操作型に改良することに焦点を当てて、研究を開始した。そして1961年には、鈴木楽器会社が世界初の鍵盤ハーモニカである「メロディオン スーパー34」(写真4)を発売した。「メロディオン」は形状が「メロディカ」によく似ていたが、輸入当時の「メロディカ」の価格が5,000円であったのに対して、「メロディオン」は2,500円とメロディカよりかなり安価であった。また、1961年末にトンボ楽器製作所が「トンボ・ピアノ・ホーン」を発売した。さらに同時期に、東海楽器製造株式会社が「ピアノカ」を発売した。当時は、いわゆる立奏用の唄口しかなかったが、児童の演奏のしやすさを考慮し、検討した結果、1963年から1966年の間にジャバラ状になっているホース型唄口が開発された。このホース型の唄口が開発されたことにより、卓上に本体を置いたまま視覚的に鍵盤を把握して演奏することが可能になった。このように1960年代に、鍵盤ハーモニカの製造開始からはじまり、楽器の改良を進めたことにより、結果として鍵盤ハーモニカの学校教育への導入が促進されることになった。その後、さらなる楽器本体や唄口の改善、楽器ケースの開発など、さまざまな改

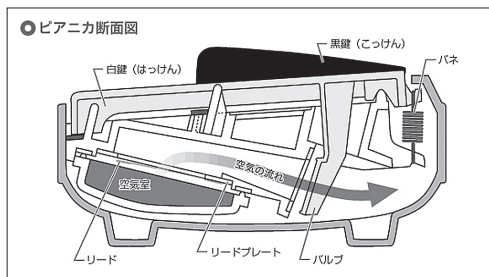
良が加えられ、現在の鍵盤ハーモニカに至っている。また、2016年11月の新聞⁽⁵⁾に「大人も鍵盤ハーモニカ」という見出しのついた鍵盤ハーモニカに関する記事が掲載され、鍵盤ハーモニカの魅力や演奏方法などが書かれている。2018年にはヤマハ株式会社が「大人のピアノ」を発売し、鍵盤ハーモニカは、いまや子ども用の教育用楽器というだけでなく、大人が演奏する楽器としても再評価されている。

2. 鍵盤ハーモニカの機能と仕組みに関して

1) 楽器分類上の鍵盤ハーモニカの位置

鍵盤ハーモニカは、ハーモニカ、アコーディオン、リードオルガンなどと同じフリーリード楽器に属している。フリーリードとは、小さな薄板の一端が枠に取り付けられ、ほかの一端は空気の圧力や吸引力によって枠の中を通り抜けながら自由に振動するもので、自由簧(こう)や自由リードとも呼ばれる。共鳴管を通して音が鳴るのではないので、調律はリードの長さや厚みを調整して行う。したがって、フリーリード楽器では演奏者が息を吹き込む穴をずらす(ハーモニカなど)、鍵盤を押さえる(鍵盤ハーモニカ・オルガンなど)、指孔をふさぐ(笙など)ことで、出したい音のリード(管)だけに空気を送ることにより音が鳴る仕組みである。また、リードの物理的性状で音程と音色が決まるので、音階を鳴らすためには複数のリードを必要とする。

鍵盤ハーモニカは、その持つ性質から楽器分類に関してさまざまな群に位置づけがされる。まず、鍵盤ハーモニカの発音体は金属性のリードであることから、リード楽器といえる。上に記したようにリードがリードプレートに植え付けられて、空気室から送り出された一定圧の空気によって振動し、この振動から出る音が鍵盤ハーモニカの音源である。(図1)



(図1) 鍵盤ハーモニカの発音機構
(ヤマハ株式会社ホームページより)

次に、鍵盤ハーモニカは鍵盤操作によって発音しようとする音を選択する鍵盤楽器である。鍵盤には、リードを振動させるための空気の流出孔を開閉するバルブがセットされており、鍵盤を押すことによってバルブが開き、空気を流出させ、リードが振動するシステムになっている。同じ鍵盤楽器でも、ピアノの場合にはタッチなどの鍵盤操作によって強弱を変えたり音楽表現を行ったりするが、鍵盤ハーモニカの場合は鍵盤操作による強弱などの音楽表現は困難であると考えられている。

さらに、鍵盤ハーモニカは吹奏楽器の性質をもっている。この楽器は、呼気を吹き込むことによって空気室に加圧された空気を蓄え、空気孔バルブを開いてこの空気を送り出してリードを振動させるという発音機構である。演奏における強弱表現、アーティキュレーション、フレージングなどは、そのほとんどを吹き込む呼気の調整及びタンギングなどの吹奏楽器的な奏法を応用して行う。

2) 鍵盤ハーモニカの発音機構について

前述したように鍵盤ハーモニカは唄口を通して、呼気を空気室へ吹き込むことによってリードが振動し、音が鳴るようになっている。空気室は薄い皿状になっており、この皿に蓋をするように、リードを電気溶接したリードプレートが空気漏れのないようにネジまたは接着剤を用いて固定されている。一つの音に対し一つずつリードがあり、それらが単独で振動できるように個々のリードの一つずつ空気流通孔が設けられている。この空気流通孔の出口には鍵盤と一体になったバルブが設置されており、空気流通孔の開け閉めを担当している。そして鍵盤を押すと、空気流通孔を閉鎖していたバルブが開き、空気室に溜め込まれていた空気が流出する。この空気の流れがリードを振動させて音を発することになる（鍵盤を戻せば、バルブが閉じて空気の流出がなくなり、リードの振動が停止することで音が止まる）。これはつまり、単一の鍵を押すと、単一のバルブが開き、次に単一のリードが振動し、単音が発音されるということであり、複数の鍵を押すと、同様の作用によって押した分の鍵すべての音が発音されることになる。

また、島崙洋一は、鍵を押すのに必要な力は同じ鍵盤楽器のオルガンが120グラムであるのに対し、鍵盤ハーモニカは40グラムであると示している⁽⁶⁾。したがって、いかに少ない力で鍵盤操作ができるかということが理解でき、指の力が弱い幼児や低学年の児童にも容易に演奏可能であることが示唆されている。さらに音を鳴らすのに必要な息の空気圧を計った実験では、最弱音の発音が水柱30mm、標準的な音量の発音が水柱60mm、音楽的な強音の発音が水柱120mm、最強音の発音が水柱180mmであることが示されている。この実験方法は、U字ガラス管に適量の水を入れ、管の一方を鍵盤ハーモニカの空気室とゴム管に直結して吹鳴させ、水柱の上昇を多数回測定し、その平均値をとったものである。水柱30mmなどの数値は、鍵盤ハーモニカの完成品の品質管理の基準数値であるという。これは、歌手の最大の呼気圧が水柱300mm程度であること⁽⁷⁾に比べるとかなり低い。鍵盤ハーモニカを音楽的に吹奏するためには呼気のコントロールが必要であるが、幼児や低学年の児童にとって吹きやすく、音楽表現にも取り掛かりやすいと考えられる。

3. 鍵盤ハーモニカにおける学校教育への導入

国内で鍵盤ハーモニカの製造・販売が開始されたころは、この楽器は授業で用いられるの

ではなく、主に小・中学校の合奏クラブで使用されていた。この時代の、鍵盤ハーモニカに関する音楽教育雑誌の記事に、ハーモニカやオルガンの指導の問題点を挙げ、鍵盤ハーモニカの利点を述べるものがいくつかあった。栃木県立大宮中学校の教諭をしていた石崎努は合奏クラブで鍵盤ハーモニカを使用した経験について「メロディオン・ピアノホーン・ピアノ等の有鍵ハーモニカは、ハーモニカの欠陥をよくおぎなっている秀れた楽器である。何と云っても鍵盤⁽⁸⁾があり、出す音を眼と指で確かめられることは、教育上非常に有利なことと思う。予算の少ない学校ではデスクオルガンの代りに備えたら随分役立つことと思う⁽⁹⁾」と述べている。

石崎努は、小・中学校で従来用いられているハーモニカについて、吹いても吸っても音が鳴るため音のコントロールが困難であることや、出す音を目で確認することができない、幹音のみで製造されているために調性が限られるといった問題点を挙げている。同時代にハーモニカの問題点や鍵盤ハーモニカの可能性を検討した人は石崎努以外にもいる。特に、1963年の音楽教育雑誌に掲載された4人の教師の座談会の企画での意見は注目に値する。例えば、千代延尚はハーモニカについて、クレッシェンド・デクレッシェンドやタンギングなどの技術が難しいことや、跳躍する音の演奏が困難であることを指摘している。ハーモニカには、各音に対して吹き口の孔が1つずつ横一列に並んでおり、この各孔に対応するように、楽器内部には発音体である薄い金属片のリードが設置されている。リードは吹き入れる空気で発音される孔と、吸い込まれる空気で発音される孔が交互に設置されているため、ハーモニカは、下の音は吹いて上の音は吸うというように、吹いたり吸ったりして演奏する。この構造によって本体が小さくても音域を広くできる上、小型で持ち運びにも便利である。しかし、吹き口が小さいため出したい音だけを鳴らすことが難しいという問題点がある。加えて、幹音のみのハーモニカや、半音が出せるハーモニカなどさまざまなハーモニカの種類があったので、学校や教師によって器楽学習で用いるハーモニカが異なることも問題であったと思われる。さらに、指導に際しては、教師が吹き口の孔を見せながら教えることは不可能であるし、全体指導において、子どもが間違った音を鳴らしていても、どの位置を吹いているのか目で見てもわかりにくい。このようにハーモニカを学校教育で使用することには、困難な点がたくさんあった。

オルガンについては、値段が高いため学校に置いてある台数が少なかったことから、指導には紙鍵盤を使うことがよくあった。しかし、紙鍵盤は実際に音が出ないし鍵盤の感触も全く違うので、子どもはオルガンの技術を身につけることは困難であると考えられる。当時の小学校教師も紙鍵盤よりも、実物の鍵盤を与えることが大事であると述べている⁽¹⁰⁾。

鍵盤ハーモニカは、ハーモニカやオルガンと同じ発音体であるが、上記のハーモニカとオルガンの問題点を補うことができると考えられる。前述の音楽教育雑誌に掲載された座談会で、朝生朝正は、ピアノッシモからフォルティッシモがハーモニカよりも簡単にできるとい

う強弱の表現の可能性について述べている。また、オルガンの音階の指導ではオルガンやピアノの鍵盤をその都度子どもたちに見せて鍵盤の状態を教えることは手間がかかって難しいが、鍵盤ハーモニカは持ち上げて子ども全員に見せることができると述べている。飯田秀一は、「鍵盤ハーモニカの場合は、押せばすぐ音が出てくる。しかもその音を眼で確かめられるという利点がある。(中略) うちへ持って行って手軽に練習できるということも利点でしょう。(中略) 笛と同じようにタンギングも指導できる。」⁽¹¹⁾と述べている。これらの座談会以外にも、「笛におけるピッチの調整の悩みもこれがリード楽器であるために解消してくれる」⁽¹²⁾という意見があった。

以上のことから、鍵盤ハーモニカには音量の変化や跳躍の演奏の可能性、及び鍵盤楽器に固有の学習内容の可能性が見出される。また、タンギングを用いて吹くことが第3学年以降のリコーダーの学習につながる。楽器が軽量であるのでオルガンではできない持ち運びもできる。さらに、目で見て確認しながら演奏や指導ができたり、鍵盤楽器のオルガンよりも安価で購入できたりすることが、学校教育への導入が進んだ理由であると思われる。

しかしながら、鍵盤ハーモニカにも、学校教育への導入に際しては問題があった。まず、価格面では、例えば、その当時ハーモニカが380円であるのに対して、メロディオンは2,500円でオルガンよりは安価であるが個人で持つことは難しかった。次に、堅牢性の問題があった⁽¹³⁾。前述の1963年の座談会では、故障によって鍵盤が動かなくなることや、ピッチがくってしまうことなどの問題点が指摘された。この座談会のほかにも、リードが腐蝕してしまうこと、アコーディオンやハーモニカのように自分たちで修理することができず、修理にも費用や時間がかかってしまうといった問題点が挙げられている。そのため、鍵盤ハーモニカが製造・販売され始めた1960年代前半は、楽器が壊れても、台数が少なくても他の楽器でカバーできるクラブ活動や鼓笛バンドの合奏で使用され、ハーモニカのように個人所有を前提にした器楽指導の中心的楽器とした学校は少なかった。しかし、1970年代に入ると「ハーモニカの代用楽器として、これを1学級分備品として購入し、歌口だけ個人持ちさせ一斉指導で取り扱う学校や、ハーモニカを持たせることをやめて、これを低学年から個人持ちにさせる学校も多くなって」⁽¹⁴⁾おり、1965年に比べて3倍の普及率を示した。この普及の背景には、前述の楽器産業における構造や堅牢性の改良、低価格化という点のほかに、学習指導要領音楽編の内容の改訂があると思われる。1968年の改訂では、新たにリズム、旋律、和声のほか音符や記号の理解という4つの内容を含む「基礎」という領域が設けられた。当時文部省教科調査官だった真篠将は、鍵盤ハーモニカは、吐く息によってフレージングの表現を工夫できることや、鍵盤によって和声や音階について目で確かめながら指導ができるという点から、「基礎」領域の学習に活用できる楽器としての有効性を指摘している⁽¹⁵⁾。従って、楽器の性能の向上と学習指導要領の指導内容に対応できる楽器固有の特性が、1970年代の鍵盤ハーモニカの音楽科教育への導入をうながしたと推測できる。

4. 教科書における鍵盤ハーモニカの扱い

1) 教科書と指導書からみる鍵盤ハーモニカ指導の特質と役割

現在、学校教育で使用されている教育出版社と教育芸術社の教科書の内容をもとに鍵盤ハーモニカ指導の特質について検討する。まず、教科書に鍵盤ハーモニカについての言及があらわれるようになったのは、1970年の教科書からである。現在使用されている2015年の教科書では、教育出版社⁽¹⁶⁾も教育芸術社⁽¹⁷⁾も鍵盤ハーモニカの指導は小学校第1学年から始まる構成になっているが、1970年の教育出版社の教科書では第4学年に鍵盤ハーモニカの指導内容が掲載されている⁽¹⁸⁾。第4学年ともなると、これまでにオルガンやハーモニカ、リコーダーの学習をしてきているため、鍵盤や詳しい運指に関しての学習内容は掲載されていない。当時の教師用指導書の中では、「この楽器は鍵盤のある楽器という点とリードを発音体とする点からオルガンやアコーディオンと共通で同属の楽器であると考えられがちであるが、この楽器はむしろ管楽器のカテゴリーとしてとらえるべきものであり、このことが明確におさえられていないと指導法を誤ることになり、この楽器のもつ特性を十分に発揮することができない⁽¹⁹⁾」と述べられている。

鍵盤ハーモニカの指導については呼吸法とタンギングと運指の大きく3つにわけてまとめられている。まず、呼吸に関しては、肺に溜まった空気に圧力を自由にかけられるので、常に一定の圧力で音が鳴るオルガンとは比較にならないほどの多彩な音楽的表現をすることが可能になる。鍵盤ハーモニカは、息を入れるだけですぐに音を鳴らすことのできる楽器であるが、音楽的な表現を実現させるためには腹式呼吸をするべきである。腹式呼吸と横隔膜による息の支えをコントロールすることで音が安定する。鍵盤ハーモニカだけでなく、歌唱やリコーダーなどを演奏する際にも音をコントロールして音楽的に表現するには腹式呼吸が必要であるので、第3学年から取り組むリコーダーの前段階になる。不必要に強い息を吹き込むと、音程も下がるし音色も悪くなりもちろん正しいフレーズ表現もできなくなる。そのため、鍵盤ハーモニカの息の使い方やタンギングによる微妙な表現力には気を付けなければならない。

次にタンギングと運指に関しては、旋律の表情がどのようなものであろうと、指の動きはなめらかなレガートになり休符も指を鍵盤から離さずに演奏することが可能である。また、ある同じ音を連打する際には鍵盤を打ち直さずに、タンギングでリズムを作るように記されている。これは、オルガンやハーモニカにはない鍵盤ハーモニカ独特の新しい演奏方法の学習を表すと考えられる。このようなタンギングでの演奏法は、低学年のオルガンの学習と第3学年からのリコーダーの学習を結びつけていることが分かる。

1976年に出版された教育出版社の教科書からは、現行の教科書と同じく第1学年から鍵盤ハーモニカの指導が行われるようになってきている⁽²⁰⁾。しかしながら、この教科書には鍵盤ハーモニカのタンギングの奏法について指摘がされている。それは、同音の時は鍵盤を押し

たままタンギングでリズムを作ることが可能であるが、最初の段階では、オルガンと同じようにタッチをして指導したほうが良いという内容である。次第にタンギングによる同音の演奏やトレモロ奏法（舌を口の中で左右に速く動かす奏法）などにも取り組みやすくなり楽しく演奏ができるということが述べられている。このように、鍵盤楽器の運指という身体操作を習得した後に、吹奏楽器の身体操作であるタンギングの練習を行うように示唆されている。また、教師用指導書の中で鍵盤ハーモニカのタンギングによる音楽表現上の特徴が書かれている⁽²¹⁾。オルガンやアコーディオンで同音を連打するときやそれにアクセントがついているようなフレーズは、楽器の特性上表現しにくく、結果として歯切れが悪くなり重さが残ってしまっていたが、鍵盤ハーモニカではタンギングによって容易に表現できるということに着目し、これを受けて鍵盤ハーモニカのタンギング指導に重きがおかれるようになった。したがって、細かな運指の指導よりも前に、ロングトーンでタンギングの練習をさせるように指導の傾向が変化している。以上のことから、ハーモニカやオルガンの代替楽器として示されていた鍵盤ハーモニカは、1976年の教科書では吹奏楽器としての長所が前面に出され、鍵盤ハーモニカ独自の表現をするための演奏方法を低学年から学習する構成へと変化したことが明らかである。

現在使用されている教師用指導書の指導資料にある「鍵盤ハーモニカの指導について」には、次のように記載されている。「タンギングには、同じ高さの音が連続する場合も含めて、音と音のつながり方をスタッカート奏やノンレガート奏などのいろいろな方法で表現したり、音の輪郭をはっきりさせたりすることができるといった演奏効果が考えられます。しかし、鍵盤ハーモニカに触れてまもない低学年の子供たちにとっては、タンギングと運指を同時にかつスムーズに行うという活動は、相当の負担がかかると考えられます。導入段階としては、楽器に親しむことを主なねらいとし、最初から無理にタンギングを取り上げず、子どもの負担を軽くするといった配慮も必要です。まずは楽器に慣れ、息を吹き込む力をコントロールできるようになってから、あらためてタンギングを取り上げるといった段階を考えましょう。」⁽²²⁾つまり、タンギングの奏法について第1学年の段階では取り上げず、まずはロングトーンや強弱など息の入れ方やコントロールの仕方を学ぶことから始めるということである。ここでは、1976年の「細かな運指の指導よりも前に、ロングトーンでタンギングの練習をさせる指導」に比べて、息のコントロールの身につけ方など吹奏についての指導法が具体的に述べられている。たしかに、鍵盤ハーモニカは管楽器のように発音とタンギングが一体になっていないので、導入段階においては負担になる可能性がある。無理にタンギングをさせて鍵盤ハーモニカや音楽の授業が苦手になるくらいなら、管楽器であるリコーダーでタンギングを学んでから鍵盤ハーモニカで練習してもいいのではないか。

2) 小学校学習指導要領の「内容」について

1968年の学習指導要領音楽編及びその指導書には、鍵盤ハーモニカの名前は見られない。しかし、1977年に第4次指導要領に即して設定された教材基準には、学校の備品として「鍵盤ハーモニカ」を保有しておくことが記されている⁽²³⁾。その後、1978年の学習指導要領では、「ハーモニカ」が指定楽器となっているものの、「第1学年及び第2学年のハーモニカ並びに第2学年のオルガンについては、学校の実情に応じて、ほかの同種の楽器に代替することができること」が示されている⁽²⁴⁾。さらに、この学習指導要領に対応した文部省発行の指導書には、「旋律楽器には、ハーモニカや笛をはじめとして鍵盤ハーモニカ、オルガン、アコーディオンなどの鍵盤楽器、また、電子楽器、管楽器、弦楽器などがある」⁽²⁵⁾という文言が記されており、ハーモニカの代替楽器として鍵盤ハーモニカが挙げられている。さらに、鍵盤ハーモニカに代替したときの利点として、「鍵盤を通して視聴一体の基礎指導ができることや、レガート奏やタンギング奏が容易にでき、かつ音量の豊かさを求めることができる点などが主なものである。次に、オルガンの代替楽器としては、当然、鍵盤を有する楽器ということになる」⁽²⁶⁾ことが挙げられており、非常に明確に鍵盤ハーモニカの有用性が明記されている。

現在（2017年告示）の小学校学習指導要領解説の器楽に関する項目⁽²⁷⁾では、

- | |
|--|
| <p>ア 各学年で取り上げる打楽器は、木琴、鉄琴、和楽器、諸外国に伝わる様々な楽器を含めて、演奏の効果、児童や学校の実態を考慮して選択すること。</p> <p>イ 第1学年及び第2学年で取り上げる旋律楽器は、オルガン、鍵盤ハーモニカなどの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。</p> <p>ウ 第3学年及び第4学年で取り上げる旋律楽器は、既習の楽器を含めて、リコーダーや鍵盤楽器、和楽器などの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。</p> <p>エ 第5学年及び第6学年で取り上げる旋律楽器は、既習の楽器を含めて、電子楽器、和楽器、諸外国に伝わる楽器などの中から児童や学校の実態を考慮して選択すること。</p> <p>オ 合奏で扱う楽器については、各声部の役割を生かした演奏ができるよう、楽器の特性を生かして選択すること。</p> |
|--|

とあるように、イの項目において鍵盤ハーモニカという言葉が出てきている。前回（2008年）の学習指導要領解説の上述と同じ器楽に関する項目には、「イ 第1学年及び第2学年で取り上げる身近な楽器は、様々な打楽器、オルガン、ハーモニカなどの中から学校や児童の実態を考慮して選択すること」⁽²⁸⁾と記載されており、これまでは「ハーモニカ」と「鍵盤楽器」の性質を兼ね備えたものが鍵盤ハーモニカであると考えられていた。2つの指導要領を比較すると、2017年告示の学習指導要領では、「ハーモニカ」がなくなって「鍵盤ハーモニカ」

に変更している。このことは、学校教育においてハーモニカよりも鍵盤ハーモニカが主流になったことを示す。

5. 質問紙調査から見た現状と新たな鍵盤ハーモニカ学習の視点について

1) 質問紙調査実施の目的とその方法

これまで鍵盤ハーモニカの歴史や教科書、指導書、副読本での取り扱い方、鍵盤ハーモニカ製造者側の意図などについて説明してきた。

筆者は、以前に小学校で音楽専科教員や小学2年生の担任として音楽指導を経験したことがある。現在は、7つの幼稚園と3つの保育園で定期的に音楽指導を行っている。それらの経験から、鍵盤ハーモニカの指導において、タンギングや指づかいなどの奏法に関する問題点や、一斉指導の方法など数々の困難な点が見出された。そこで実際の教育現場、特に初期教育の現場における鍵盤ハーモニカの運用実態や指導方法などの問題点について調査するために、2016年8月に小学校の教諭29名（音楽専科7名、音楽専科以外22名）、幼稚園教諭5名、保育士1名、特別支援学校教諭2名を対象に教育現場での鍵盤ハーモニカの運用実態などについて質問紙調査を実施した。アンケート回収率は73%であった。調査方法は無記名方式で実施し、郵便で送付した。質問は選択式と記述式を設け、質問概要は以下のとおりで合計19問用意した。

1. 回答者に関する事項

1-1 性別, 1-2 年齢, 1-3 経験したことのある校種, 1-4 勤務年数, 1-5 過去の担当学年, 1-6 現在の担当学年

2. 鍵盤ハーモニカの指導に関する事項

2-1・2-2 使用メーカーとその理由, 2-3 音楽科教育で鍵盤ハーモニカが必要であるか, 2-4 鍵盤ハーモニカの長所と短所, 2-5 リードについて, 2-6 あったらいいなと思う機能, 2-7・2-8 鍵盤ハーモニカの取扱時間, 2-9 鍵盤にシールを貼っているか, 2-10 鍵盤ハーモニカの指導の難点, 2-11 演奏技術上の難点, 2-12 鍵盤ハーモニカで育みたい能力, 2-13 指導で使用する教材

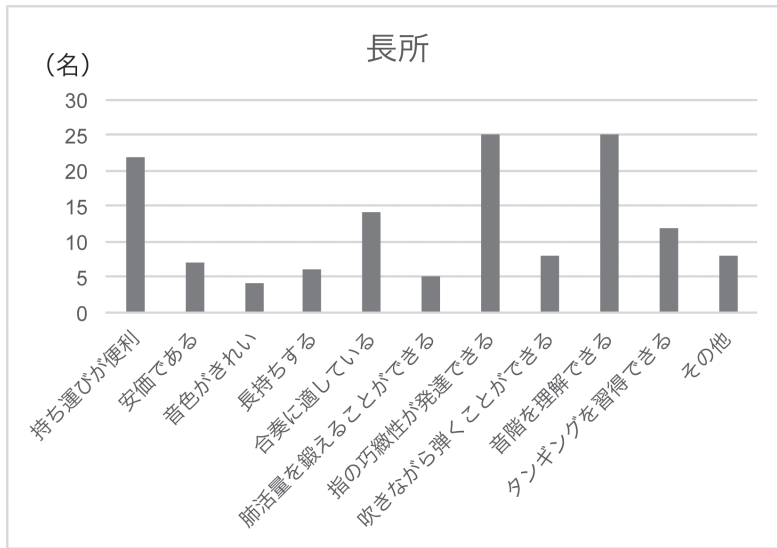
2) 質問紙調査から見た現状と問題点

ここでは、自由記述方式を設けた質問の「問2-4 鍵盤ハーモニカの長所と短所」「問2-10 鍵盤ハーモニカの指導の難点」「問2-11 演奏技術の難点」「問2-13 鍵盤ハーモニカで育みたい能力」を取り上げ、結果について考察する。

鍵盤ハーモニカの長所と短所について

問 2-4 鍵盤ハーモニカの長所と短所について該当する項目全てにレをつけてください。その他を選択された方はその理由をお聞かせください。

鍵盤ハーモニカの長所に関しては、「指の巧緻性が発達できる」と「音階を理解できる」が25名で最も多く、「持ち運びが便利」22名、「合奏に適している」14名、「タンギングを習得できる」12名（…以下省略…）という結果であった（図2）。



(図2) 鍵盤ハーモニカの長所

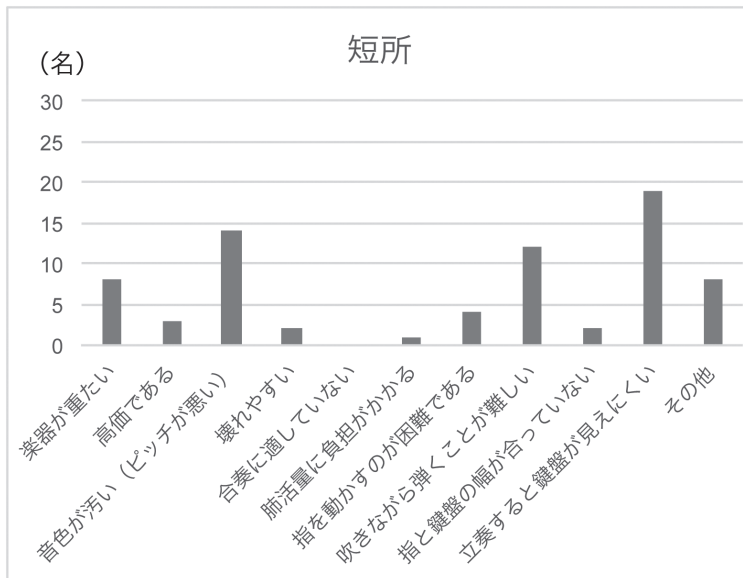
その他と回答した8名の記述は以下のとおりである。

- ・ リコーダーと違って鍵盤が見えるので旋律楽器の導入になる
- ・ 木琴や鉄琴などの音楽会で使う楽器全ての基本となる（ドレミの位置）
- ・ 吹奏楽器（リード楽器）としての構造的特徴と鍵盤楽器としての演奏上の特徴を併せ持つ点が教育楽器としての利便性を持つこと
- ・ 低年齢児でも音を簡単にならすことができる
- ・ ホースを口にくわえないと音が出ないので全体に話をするときの指導はオルガンや打楽器に比べるとしやすい。
- ・ 一人一台もつことができ集団指導に適している。吹く力、口の筋肉を鍛えることができ言葉の発音を改善するのも効果があるのではないかと（幼稚園では吹き絵やシャボン玉遊びでそのことを狙って遊ぶことがある）
- ・ リコーダーを学ぶ前段階として鍛えることができる

〈鍵盤ハーモニカの長所に関する考察〉

鍵盤ハーモニカの長所の回答から、指導者は鍵盤楽器の特徴である視覚から音の高低、配列について学ぶことができる点と、指を動かすことや運指の学習にかかわる点が長所であると答える人が多いことが明らかとなった。第3学年から取り扱うリコーダーの前段階として、鍵盤ハーモニカを用いてタンギングを習得できる点を長所と見る人の数が多いと予想していたが、音階や指の巧緻性（運指）の面で利点があると考えられる指導者が多いことが分かった。長所の「その他」の記述においても、音の配列の習得や運指にかかわる内容が長所と考える意見が多くみられた。さらに、指の巧緻性の発達や肺活量を鍛えるということだけでなく、口の筋肉の発達を促すという新たな視点がみられた。

次に、鍵盤ハーモニカの短所に関しては、「立奏すると鍵盤が見えにくい」が19名で最も多く、「音色が汚い（ピッチが悪い）」が14名、「吹きながら弾くことが難しい」が12名、「楽器が重たい」8名（…以下省略…）という結果であった（図3）。



(図3) 鍵盤ハーモニカの短所

その他と回答した8名の記述は以下のとおりである。

- ・高価であるため3年前まで本体貸し出しで吹き口のみ購入させていた
- ・楽器としては安価であるが、教育用品としては高価
- ・吹き口が外れやすい・紐を取り付けにくい・ホースをしまいににくい
- ・ホースが破れる・吹き口が壊れやすい
- ・メーカーによってピッチが違いクラスでそろっていない場合に不都合が生じる

- ・楽器によってピッチが違うことがある。幼児にとっては息の調節が難しく音色が荒くなってしまう。なぜか安っぽい音に聞こえてしまう
- ・特別支援学校では吹きながら弾くということの難しさと衛生面でなかなか授業に取り入れることができない。今後簡単な合奏をしたいと考えており模索中
- ・衛生面が少し心配

〈鍵盤ハーモニカの短所に関する考察〉

短所では、立奏時の鍵盤の見えにくさが圧倒的に多かった。筆者の経験上、幼児や児童が立奏で吹く機会というのは主に音楽会などの発表会（合奏）である。そのため、卓上で十分に練習をして運指を身につけてから、立奏の練習をし、発表会などの立奏時には鍵盤は見ないで演奏できるように指導すべきであると考え。鍵盤を見て演奏するということは視線が鍵盤の高さに下がり、合奏においては指揮を見ないことにつながる。これは、合奏が揃わない要因にもなる。次いでピッチの悪さが指摘された。これは、リードに付いた水蒸気が「リードの錆び」を招き、それがアゲミ（プレートとリードの距離）や調律に変化が起こるからである。そのため、毎授業の終わりにつば抜き作業を徹底し、アゲミの調整や調律を指導者がすれば解決する問題である。鍵盤ハーモニカと同じ鍵盤楽器でオルガンよりも軽い電子キーボードならピッチの問題は起こらないが、鍵盤ハーモニカの重要な長所は「吹く」ことの教育的意味である。吹奏楽器と鍵盤楽器を併せ持つことへの利便性は長所の自由記述欄にも書かれていた。しかし短所で「吹きながら弾くことが難しい」に12名の回答がみられたということは、吹奏楽器や鍵盤楽器の経験が乏しい子どもにとって吹くことと弾くことを同時に行うことが難しいと考える指導者も多いということである。その原因は、吹きながら弾くに加えて、タンギングや運指、強弱などさまざまなことに注意しながら演奏をしなければならないからである。この欠点を克服するためには、やはり何度も練習を重ねて身につけることが大事である。個人差があると思うが、タンギングをすることが困難であるのならば、段階的に運指を徹底し、それからタンギングを取り入れるというやり方もある。

鍵盤ハーモニカの短所についてその他の自由記述欄に書かれていたものは、価格の問題、部品に関する問題、ピッチの問題、衛生面の問題に大きく分けることができる。やはり楽器としては安価であっても教育用楽器となると高価であるという意見がみられた。このことに伴って、現在でも唄口だけ購入して本体は学校で管理している小学校もあるという現状が見いだされた。部品に関する問題で多く挙げられたものは、ホース型の唄口である。たしかに小学1年生の指導をしていても、ホースを噛んで穴があく（つまり音が鳴らなくなる）ことや、楽器を持つときにホースを掴んでしまい（楽器が宙ぶらりんの状態）ホースが伸びることから生じるケースへの収納のしにくさなどを目の当たりにしてきた。また、衛生面の問

題についても、指導者が導入の段階で注意を促すべきであると思われる。

鍵盤ハーモニカの指導の難点について

問 2-10 鍵盤ハーモニカを指導する上で、難しいと思う点を教えてください。

指導での困難な点についての回答率は約 90%で、自由記述方式での回答方法から多くの回答が得られたため、弾くことに関する意見、吹くことに関する意見、指導全般に関する意見、その他の 4 つに分類した（表 1）。さらに、分類されたそれぞれの回答において似通った意見を抽出し、その中でも中心となる意見や興味を抱いた意見について挙げる。

弾くこと に関して	指づかい (9名)	<ul style="list-style-type: none"> 指運びが間違っても吹けてしまい、とりあえず弾けたら OK の子どもが多く指づかいまで指導しきれなかった 思っている指番号と音が違い混乱する 指の位置が移動するとき（ソに 1 の指を置くなど）は特に個人差が出るので難しい ド～ソ以外の音が出た時の指づかい 5本の指を使うこと（1本指で弾く癖が取れない）
	指くぐり・ 指またぎ (7名)	<ul style="list-style-type: none"> 指くぐりや指またぎを指導するとできない子どもが多い 指くぐりと指またぎが混乱する ミからファにいくときの指くぐり
	跳躍する音 (2名)	<ul style="list-style-type: none"> 1～5の指をうまく使って跳躍する音の習得が難しい ド→ミのような跳ぶ動き
吹くこと に関して	タンギング (7名)	<ul style="list-style-type: none"> タンギングや同じ音を続けて吹く際、指はそのままタンギングをするということを定着させるのが難しい 指の動きに合わせてタンギングをする点
	ロングトーン (1名)	<ul style="list-style-type: none"> 音が滑らかにつながらず、切ってしまう
指導する ことに関 して	一斉指導 (13名)	<ul style="list-style-type: none"> 運指のチェックをするのが難しい 全員同じレベルまで引き上げること（できる子は飽きる、苦手な子は諦める） 個別指導に時間をかけられない→子ども同士でチェックしあっている 全員がどのくらいできているのか把握できない
	演奏技術に 関する指導 (12名)	<ul style="list-style-type: none"> 指とタンギングの一致やアーティキュレーションの指導が難しい 運指の指導の仕方（指一本で弾く子どもの支援） 自分自身が鍵盤ハーモニカの知識が乏しいため本当にその指導方法であっているのか不安 吹きながらの指導になると言葉がけができなくなるので TT に見本となってもらえることが多く TT の実力も欠かせない タンギングの指導について口の中のことなので視覚で伝えるにくい

その他	個人差 (8名)	・学校外での音楽経験(出身園や習い事)によってスタート段階から個々の差がある
	その他の問題点 (7名)	<ul style="list-style-type: none"> ・目で見て演奏できるホースと、指と鍵盤が見えなくなるマウスピースとの間に大きな壁がある。 ・鍵盤に集中してしまい合奏時に指揮を見ることができない ・自分が演奏することに必死になり、友達と音を合わせる喜びを感じるのが難しい ・技能的に難易度の高い曲を演奏させることばかりに価値を置き音楽を演奏することや味わうことの楽しさそのものに目を向けない先生方が意外と多い ・環境によっては演奏後の手入れが難しい所

(表1) 鍵盤ハーモニカの指導に関する難点

〈指導での困難な点についての考察〉

①弾くことに関する意見について

指づかひの指導は指導者なら誰しもが教える難しさを覚える内容であると思う。鍵盤ハーモニカはリコーダーのように決まった運指がないため1本の指でも弾くことができしてしまう。就学前から鍵盤ハーモニカを使用している園に関しては、教科書なしで指導するため、5本の指の使用を徹底した指導はなかなか難しい。この段階において1本指で弾くことに慣れてしまうと、小学校に入ってから直すことが困難であるように思われる。鍵盤ハーモニカ導入時になぜ5本の指を使って演奏しなくてはならないのか説明をする必要があると感じた。

②吹くことに関する意見について

やはりタンギングの指導が困難であるという結果であった。指を動かして鍵盤を弾くことに加えて、そのタイミングでタンギングをするということは幼少期の子どもにとって高度な技術であると思われる。まずは楽器を使わずにタンギングのみの練習を行った上で、同じ音をタンギングで吹く練習をし、曲をタンギングで吹くというように段階を踏まえた指導が好ましい。しかし、吹くこと及び弾くことに関しても正しい奏法にばかり捉われて鍵盤ハーモニカの学習を楽しめないという状態に陥らないように注意する必要がある。

③指導全般に関する意見について

1クラス約30名の児童を1人で一斉に指導することが難しいと答える回答者が多かった。これは鍵盤ハーモニカ及び音楽科の授業に限らず、他教科でも一斉指導は困難である。特に導入段階では音の理解や運指について一人ひとり確認をとって習熟度を測り、得意な子どもと苦手な子どもの格差が開かないように意識して指導しなければならない。そのためには導入の段階で、時間をかけて着実な技能の習得をさせることはもちろん、得意な子どもが苦手な子どもを支援するような、子ども同士で技術を高めあえる学習づくり

をしていくことが望ましい。

鍵盤ハーモニカの演奏技術の難点について

問 2-11 あなたご自身が鍵盤ハーモニカを演奏する上で、難しいと思う点を教えてください。

この質問では、子どもが演奏するときの内容ではなく、指導者自身が演奏をする上での困難な点について調査を実施した。回答率は約90%で、自由記述方式での回答方法から多くの回答が得られたため、弾くことに関する意見、吹くことに関する意見、その他の3つに分類した(表2)。さらに、分類されたそれぞれの回答において似通った意見を抽出し、その中でも中心となる意見や興味を抱いた意見について挙げる。

弾くこと	鍵盤の幅について (11名)	<ul style="list-style-type: none"> ・鍵盤の幅が小さいので細かい指の動きがしにくい ・鍵盤が小さく黒鍵と白鍵の指づかいが下手でよく音ミスをする
	その他 (2名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ラより高い音が出てきた時の運指 ・鍵盤を弾く際の力加減が難しい
吹くこと	タンギング (2名)	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ音を続けて演奏する場合タンギングが必須である点
	ロングトーン (3名)	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆったりした曲調の時タンギングの場所まで息が続かない ・息がもたない
	ブレスの タイミング (6名)	<ul style="list-style-type: none"> ・息を吸うとフレーズが途切れるので息継ぎのタイミングが難しい ・息を吸うタイミングが分からなくなることがある ・音が途切れないように息継ぎすること
	立奏 (8名)	<ul style="list-style-type: none"> ・立奏すると幅が分かりづらく音を外しやすい ・立奏時鍵盤が見えない
	その他 (3名)	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムを正確に刻みながら吹くのが難しい ・音色を自分で作らなければならないところ(よさでもある) ・指を動かす以外に息の使い方も考えないといけない
その他	音色 (2名)	<ul style="list-style-type: none"> ・音が混ざりにくい ・単調になりやすい
	その他の 問題点 (5名)	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏中にふとホースが抜けてしまう時がある ・指を気にするから暗譜しないといけない ・ホースを使って吹くと鍵盤は見えるが見栄えが良くない ・ピアノと違い指を置いたまま連続して音が出せる所

(表2) 鍵盤ハーモニカの演奏技術の難点

〈演奏技術の難点の考察〉

指導者自身が演奏する中で困難に感じる意見について、弾くことに関する意見では特に鍵盤の幅について多くみられた。その理由は、やはり鍵盤ハーモニカの鍵盤の幅が大人の手にとっては小さすぎるということである。和音を弾いたり細かいメロディーを弾いたりする際にミスタッチをするという回答が多かった。克服するためには、鍵盤ハーモニカに限らずどの楽器を演奏する時にもいえることであるが、苦手な箇所を何度も練習したり、速度を遅くして練習したりすることが効果的であると考えられる。

吹くことに関する意見では、問2-10の指導上困難な点と同様に、タンギングとロングトーンの問題などに加え、ブレスのタイミングやボリューム、立奏にかかわることなど新たな問題点が発見された。これらは、フレージングを強弱やスラー、スタッカートなど音楽的に演奏しようと思うときに表れる問題点であると思われる。また、鍵盤ハーモニカは合奏に適した楽器として学校教育に取り入れられているにもかかわらず、立奏において鍵盤を見て吹けないという点や卓奏用唄口のホースでは鍵盤は見えるが見栄えが悪いという点を今後改善すべきであると考ええる。

以上の意見から大人が演奏するときにも困難な点があり、教育用楽器といえども決して簡単な楽器ではないということがうかがわれる。

鍵盤ハーモニカで育みたい能力について

問 2-12 鍵盤ハーモニカの指導を通して、子どものどのような能力を育みたいですか

鍵盤ハーモニカを通して育みたい能力についての回答率は約95%で、自由記述方式での回答方法から多くの回答が得られたため、音階や音高感に関する意見、演奏技術に関する意見、心理的発達に関する意見、その他の4つに分類した(表3)。その中でも中心となる意見や興味を抱いた意見について挙げる。

音階や音高感 (20名)	<ul style="list-style-type: none"> ・音遊びや演奏を通して音高感などを養いたい ・音階をイメージする力 ・音階や音の高低感覚を身につけさせたい ・音程感を身につける
演奏技術 (19名)	<ul style="list-style-type: none"> ・タンギングの能力 ・読譜をし、それを弾くことができる ・みんなと合わせて演奏する力 ・表現力(音の強弱やテンポ) ・和音の響きを感じとる力(きれいな、不快など) ・曲や音階などを覚えていく記憶力

<p>心理面 (18名)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器(音)を合わせることに美しさを感じる力 ・楽器を扱う態度や大切に思う気持ち ・音を出すことの楽しさや達成感 ・友達と心と音色を合わせる経験を通して共同性をはぐくみたい ・演奏できるようになるまでの根気強さ ・演奏する楽しさ, 合奏する楽しさ
<p>その他 (4人)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し練習することでできなかったことをできるように自ら努力する能力 ・他人と音を合わせたり音の重なりを感じるなどからクラスや学年で合奏することの楽しさや協力することの大切さを知り, 自分の役割を果たす(聴きあって自分のパートの音を出す) ・二つのことを考えこなしていく力(処理する力) ・子どもの五感をすべて育てて音に対する興味関心を持たせ, その指導を通して音楽の面白さや楽しさを共有できる能力を育みたい

(表3) 鍵盤ハーモニカを通して育みたい能力

〈育みたい能力に関する考察〉

鍵盤ハーモニカの指導において育みたい能力としては、ほとんどの子どもが鍵盤に出会う初めての楽器が鍵盤ハーモニカであると考えられることから、音階の習得を挙げる指導者が多いようである。リコーダーと比べて、音階や音高感を視覚と聴覚で確認して学べるため、最適な楽器であると思われる。これは、鍵盤ハーモニカだけでなくピアノやマリンバなどの鍵盤のある楽器でも達成できることではあるが、一斉指導をする中で一人に一台用意できるという面でやはり鍵盤ハーモニカが最適ではないかと思う。技術面では、タンギングや弾く能力だけでなく、和音の響きを感じとる力のような、聴く(鑑賞する)能力の成長を促すということも考えられ、友だちの音と自分の音とを合わせるという美的感覚も育てていきたい。また、鍵盤ハーモニカの学習を通して達成感や共同性、2つのことを処理する力を育むといった回答には、この楽器が心理的な成長や生きる力を育むことが可能であることが示唆されている。

新たな鍵盤ハーモニカ学習の視点について

ここでは「鍵盤ハーモニカにあったらいいなと思う機能」について論述する。質問に対して「ある」と答えた回答者に自由記述方式で具体的な機能についての意見を得た。その結果は、現場の先生ならではのアイデアに満ちた大変興味深いもので、新たな鍵盤ハーモニカへのアプローチになるであろう。

問 2-6 こんな機能があったらいいな、と思うものはありますか。あるとお答えした方は、具体的にどのような機能が教えてください。

約3分の1の回答者が、「ある」と答えた（表1）。

ある	13名
特にない	24名

（表1）鍵盤ハーモニカに求める機能

「ある」と回答した13名の「あったらいいな」と思う具体的な機能については以下の通りである。

【具体的にあったらいいなと思う機能について】

- ・ホースの部分が壊れない
- ・楽器が重たいので軽くしてほしい
- ・首からさげることのできるようなひも、もしくはひもをつけやすい穴
- ・持って演奏するときに手をはめるバンドだけでは心細いので体に下げられるような紐があったらよい（ストラップのような）
- ・吹き口が抜けないようにする（ロックしたり解除したりできたら便利）
- ・短い吹き口と長いホースの中間の長さの吹き口があれば音楽会の時などに子供が演奏しやすくなる
- ・鍵盤を遠隔で光らせることができる機能
- ・形状保持ができるホースがあればマウスピースを固定して卓奏でも立奏でも吹きやすくなる
- ・親指を置く滑り止めのような機能
- ・録音機能を使ってその録音したものを流すときに鍵盤が光る機能
- ・ピアノのペダルのように響かせることができるボタン
- ・異なるメーカーの場合ピッチが違って困るので調整できるとよい

〈新たな鍵盤ハーモニカの視点に関する考察〉

ここには現場で働く指導者が、あったらいいなと思う数々の具体的な機能が見出された。それらを、①楽器の軽量化、②形状記憶、③鍵盤の可視化の3点にまとめた。以下、それぞれについて考察していく。

①楽器の軽量化の必要性について

鍵盤ハーモニカの短所として楽器が重たいと感じられるという意見があったことから明らかである。楽器が軽くなれば気軽に立って演奏ができたり、頻繁に家に持って帰って練習したりすることも可能になるのではないか。そうすることによってさらに楽器に親しみを抱き、音楽を好きになると思われる。また、これに関連して首からぶら下げること

のできるストラップ機能についての回答がいくつか見られた。ストラップを使用すると、腕の負担を軽減することができて、楽器を落とす心配もない。しかし首に負担がかかるため、軽量化ができればストラップ機能を有効に使うことも可能であると思われる。さらに、ストラップは楽器を安定させる効果があり、楽器が安定すると音質の安定性も確保できる。回答の中にあつた親指を置く滑り止めのような機能（リコーダーでいうサムレスト機能）についても同じことがいえる。

②形状記憶について

特にホース型の唄口（卓奏用唄口）に関するものが多かった。吹いているうちにマウスピースの唄口が抜けることや、ホースが破れるという現状からいうと、唄口が抜けないようにロックできるようにしたり、ホースを噛んだり引っ張ったりしない指導の徹底など、改良の余地があると考えられる。「黒の短い吹き口（立奏用唄口）と長いホース（卓奏用唄口）の間の長さの吹き口」に関しては、実際に鈴木楽器会社からは立奏用唄口と卓奏用唄口の間の長さのマウスピースが販売されている。しかし、このマウスピースの認知度は低いようである。なお、他社の場合、従来の立奏用唄口と卓奏用唄口しか製造していないため、本体から唄口までの長さを調整できるような唄口の開発を、今後検討すべきであると思う。

③鍵盤の可視化について

近年の電子キーボードに内蔵されているような、録音機能や鍵盤を光らせることができる機能についての記述があり、これが実現できれば一斉指導をスムーズに行えることが予測される。現在、鍵盤の可視化のために色のついたシール（ドの音は赤色など）を貼っていることがよくある。質問紙調査の「今まで指導してきた中で、鍵盤ハーモニカの鍵盤に色つきシールを貼っている子どもはどのくらいいますか」という質問に対しても、全員貼っている6名、だいたい貼っている14名、半分くらい貼っている12名で、全体の約85%がシールを貼っているという結果であった。谷村・門脇による幼稚園・保育園を対象とした幼児期の子どもに鍵盤ハーモニカを指導する方法についてのアンケート結果でもほとんどの園で色シールを鍵盤に貼り、音と色を一致させるという手法で指導を行っている⁽²⁹⁾ということがわかっている。この指導法は子どもにとって理解しやすいが、色を認知して間違いなく押さえることに専念してしまうため、楽器導入の際に色と鍵盤を一致させて演奏することが果たして子どもの音楽的な発達につながるかどうかは疑問である。発達の初期段階の子どもは、視覚や聴覚と同時に弾くという感覚を働かせることは難しいので、まずは頭の中で音をイメージしながら弾くことが望ましいと思われる。そのために鍵盤楽器の導入には鍵盤にシールを貼って音を発見する体験と同時に、音名唱をすることや、身体でメロディーの高低を表現するなどの体験をさせることが重要である。また、導入の段階ではシールを貼り、学習を重ねるにつれて、シールを剥がしていくといった目標

をもって学習計画を立てるべきであると思う。

6. 研究のまとめ

1960年代に製造され始めた鍵盤ハーモニカは、その後あらゆる改良やさまざまな装置の開発が行われ、それによって従来のクラブ活動や鼓笛バンドの合奏のみならず、音楽科の器楽指導において中心になる楽器へと発展した。そして1970年代には教科書の指導書に、鍵盤ハーモニカの指導について記載されるようになった。鍵盤ハーモニカという名前からハーモニカの代替という印象を与えるが、ハーモニカの指導や演奏の困難さを改善した楽器であるだけでなく、吹奏楽器と鍵盤楽器を兼ね備えたこの楽器の特性が画期的であったからこそ今日も学校教育に欠かせないものとなったのであろう。

さらなる試みとして、新たな鍵盤ハーモニカ学習へのアプローチについて、現場の教師の意見を取り入れ考えたものの、まだ提案にとどまっているため、今後教育の現場で実践し、活かしていきたいと考えている。

演奏技術にかかわるタンギングについて、また鍵盤ハーモニカの長所や短所をはじめ、指導上困難な点や演奏上困難な点などについても数々の意見が寄せられた。タンギングについては、鍵盤ハーモニカのプロ奏者である松田昌が、「鍵盤ハーモニカは、ほかの管楽器と同じく、タンギングを使わないでレガートに吹くことが基本と考えましょう」⁽³⁰⁾と述べている。リコーダーへの導入として鍵盤ハーモニカでのタンギング指導の必要性を主張する指導者が多く、タンギングにとらわれがちであるが、鍵盤ハーモニカはリコーダーとは楽器の構造も奏法も全く違うためリコーダーと鍵盤ハーモニカを結びつける必要はない。鍵盤ハーモニカではすべての音に対してタンギングをしなければならないと思込んでいる指導者も多いようだが、ほかの楽器と同様、タンギングをせずに吹いた方が良いフレーズとタンギングが必要なフレーズで使い分けることが理想である。例えばスラーがついているところはレガート（タンギングをしない）で演奏し、スタッカートがついているところはタンギングをすると区別しやすい。

鍵盤ハーモニカは鍵盤楽器と吹奏楽器の特質を兼ね備えた楽器である。この特色を生かした指導計画が必要である。そのためには、鍵盤ハーモニカに取り組む子どもの成長段階を踏まえ、それにふさわしい技術を詳細に考察し、学習者が鍵盤ハーモニカと関わるたびに達成感を感じられるような指導を行うことが期待される。また、歌唱や身体を使った表現の活動などと関連づけながら、一人ひとりの能力に即した指導に配慮することが不可欠である。

<資料>



(写真1) シンフォニアム
(筆者が浜松楽器博物館で撮影)



(写真2) プサルメロディコン
(<http://www.concertina.com/chambers/michaelstein> より)



(写真3) メロディカ ソプラノ
(<http://de.playhohner.com/> より)



(写真4) メロディオン スーパー 34
(鈴木楽器会社ホームページより)

註

- (1) 谷村宏子・門脇早聡子「就学前教育としての鍵盤ハーモニカ導入の指導に関する一考察」『教育学論究』4, 2012. 関西学院大学教育学会, pp.27-39
- (2) ルードルフ・E・ラドシー / J・デーヴィッド・ボイル共著、徳丸吉彦・藤田美美子・北川純子共訳『音楽行動の心理学』1985, 音楽之友社, p.35
- (3) Kazutaka Sakamoto『素晴らしき鍵盤ハーモニカの世界』(<http://skmt.cooktone.com/kenhamo.html>) 2019/7/3 現在
- (4) 執筆者不明『トルー・ストーリィ』11巻3号1959. p.121
- (5) 朝日新聞2016年11月から28日朝刊, p.13
- (6) 島崙洋一「鍵盤ハーモニカの特質と幼児への指導法」『大垣女子短期大学研究紀要』24. 1986. pp.46-65
- (7) クリスティアン・ステーンストロプ著、前川陽郁・西田和久訳『ティーチング・プラス —管楽器指導の新しいアプローチ』2008, 作品社, p.67
- (8) 鍵盤は原文通り
- (9) 石崎努『器楽教育』5巻6号1962, 日本器楽教育連盟, p.11
- (10) 朝生朝正・小沢秀雄・河合勇・千代延尚『器楽教育』6巻11号1963, 日本器楽教育連盟, p.20
- (11) 朝生朝正・小沢秀雄・河合勇・千代延尚, 前掲書, p.20
- (12) 千代延尚『教育音楽 小学版』1963, 音楽之友社, p.44

- (13) 山中和佳子「日本の学校教育における鍵盤ハーモニカの導入」『福岡教育大学紀要』65, 2016. pp.17-24
- (14) 『新版標準音楽4年教師用指導書』1970, 教育出版社, p.103
- (15) 真篠将『教育音楽 小学版』23巻12号1968, 音楽之友社, pp.44-48
- (16) 『小学音楽 音楽のおくりもの1～6』2015, 教育出版社
- (17) 『小学生の音楽1～6』2015, 教育芸術社
- (18) 『新版標準音楽4年』1970, 教育出版社
- (19) 『新版標準音楽教師用指導書4年』1970, 教育出版社, p.103
- (20) 『新版音楽1年教師用指導書』1976, 教育出版社
- (21) 『新版音楽1年教師用指導書』1976, 教育出版社
- (22) 『小学生のおんがく1 指導書研究編』2015, 教育芸術社, p.69
- (23) 文部省『小学校指導書 音楽編』1977, pp.88-89
- (24) 国立教育政策研究所ホームページの学習指導要領データベース参照 (<http://www.nier.go.jp/guideline/s52e/chap2-5.htm>) 2019/7/3現在
- (25) 文部省『小学校指導書 音楽編』1977, p.88-89
- (26) 文部省, 前掲書, p.88-89
- (27) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』2017, p.131
- (28) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』2008, p.91-92
- (29) 谷村宏子・門脇早聴子, 前掲論文, pp.27-39
- (30) 松田昌『絶対! うまくなる 鍵盤ハーモニカ100のコツ』2016, ヤマハミュージックメディア, p.52